研究報告

ラドヤード・キプリングとハーバート・スペンサーがジャック・ロンドンに与えた影響についての再考察「ジャック・ロンドン，デビュー物語」再考

小古間甚一

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】本稿は，2014年3月に発表した拙論「ジャック・ロンドン，デビュー物語」で論じたラドヤード・キプリングとハーバート・スペンサーがジャック・ロンドンに与えた影響について再考察した研究報告である。拙論ではキプリングとスペンサーの影響について論じる際に，ロンドンの短篇小説研究書であるジェームズ・Ｉ・マクリントックの『白い論理』を参照したが，2014年11月に出版されたジェイ・ウィリアムズの『航行する作家』を読んだのち，キプリングとスペンサーの影響について修正すべき点が見つかった。キプリングの影響については，キプリングの散文を読む前にすでにロンドンは短篇を書くテクニックを身につけていたということ，ロンドンがキプリングから影響を受けたのはキプリングの詩であったということである。スペンサーの影響については，ロンドンが1900年に書いたエッセイ「文学的進化の現象」の文体や文学についての進化論的発想はスペンサーの『文体の哲学』から得た可能性は少ないということである。

キーワード：ジャック・ロンドン，ラドヤード・キプリング，ハーバート・スペンサー，短篇小説のテクニック，進化論

Ⅰ．はじめに

1900年に短篇集『狼の息子』（*The Son of the Wolf*）で本格的な作家デビューを果たしたジャック・ロンドン（Jack London）は，1916年12月に死去するまで200篇近くの短篇小説を書いた。2014年3月に出版された『いま読み直すアメリカ自然主義文学　視線と探究』の拙論「ジャック・ロンドン，デビュー物語―短篇小説と世紀転換期のアメリカ文学市場」は，ロンドンが短篇小説を書き，投稿していた1898年から1900年の時期に焦点を当て，彼の短篇が当時の文学市場に受容された歴史的要因を説明しながら，なぜ彼が短篇作家になったのか，その理由を探った論文である。それから数か月後，同年11月に，かつて『ジャック・ロンドン・ジャーナル』（*Jack London Journal*）の編集責任者を務めていたジェイ・ウィリアムズ（Jay Williams）が『航行する作家：ジャック・ロンドンの想像力1893-1902』（*Author Under Sail: The Imagination of Jack London, 1893-1902*）を出版した[1]。友人や編集者との手紙などの個人的な資料だけでなく，世紀転換期の雑誌など歴史的背景に関する資料まで，ロンドンとその時代に関する膨大な資料を駆使して，ロンドンと想像力との関係に注目しつつ，作家ロンドンの全体像を再構成しようとした労作である。そのウィリアムズの研究書を読んでいるうちに，拙論に修正すべき点があることがわかった。その修正点とは，ラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling）とハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）に関するものである。いずれの人物もデビュー前のロンドンに影響を与えた人物として拙論で紹介しているが，ウィリアムズの著作では，彼らとロンドンとの関わりについて，より詳細な検討が加えられている。本稿は，ウィリアムズの研究の一部を踏まえて，キプリングとスペンサーがロンドンに与えた影響について再考察した研究報告である。

Ⅱ．ロンドンとキプリング

「ジャック・ロンドン，デビュー物語―短篇小説と世紀転換期のアメリカ文学市場」（以下，「デビュー物語」とする）では、ロンドンが短篇小説

2015年12月8日受付：2016年2月15日受理
責任著者　小古間甚一
住所　〒096-8641　北海道名寄市西４条北８丁目１
E-mail：jkogoma@nayoro.ac.jp

を 20 世紀にふさわしい文学ジャンルとして注目していたという事実を，1899 年 4 月に友人クラウズリー・ジョンズに宛てた手紙の文章から抽出した。その手紙で，彼は「現代文学において短篇小説（short story）の重要性がいかに高まっていることか。1 世代か 2 世代後には小説（novel）は消滅する運命にあるようだ」（London, *The Letters* 69）と語り，長編小説が廃れて短篇小説が隆盛するという，文学進化論とも言うべき見解を述べている。こうした文学進化論的な発想は，1900 年 10 月の雑誌『ブックマン』（*Bookman*）に掲載された「文学的進化の現象」（“Phenomena of Literary Evolution”）というエッセイで，より明確に示されている。

「文学的進化の現象」はロンドン研究において言及されることはあっても，それほど重視されてこなかったエッセイだが，このエッセイは，ロンドンの文学進化論的な発想と短篇小説についての考えを知るうえで重要な資料である。ロンドンは「進化の一般的法則に則り，あらゆる思考，そして思考を表現するあらゆる方法も凝縮されたものでなければならない。話し言葉であれ，書き言葉であれ，言語はこの法則の作用から逃れることはできない」（61）と述べて，進化論の立場を明確にしている。そして，歴史的に見て文が簡潔になっていることを数字をあげて例証したあとで，「今日の文学のあらゆる形態がこうした凝縮の傾向を例証している。短篇小説（short story）の成長は，長編小説（long novel）の衰退によって示されている」と述べている（63-64）。19 世紀最後の 20 年間は，1880 年代にブランダー・マシューズ（Blander Matthews）の短篇小説論が登場し，1891 年には国際著作権法が成立して雑誌でアメリカ作家の短篇の需要が高まるなど，短篇がアメリカ文学の一つのジャンルとして成立する動きが活発な時代だった。「文学的進化の現象」を読むと，文学の新しい動きをロンドンも感じとっていたことがわかる。その意味では，「文学的進化の現象」はロンドンが短篇作家としての道を歩む決意を示したエッセイとも読める。

「デビュー物語」は，1900 年の『狼の息子』出版以前，ロンドンが短篇を書き投稿していた時期に彼に影響を与えた２人の人物について言及している。当時英米で人気を博していた作家ラドヤード・キプリングと進化論哲学者ハーバート・スペンサーである。この二人がロンドンに与えた影響について論じる際に，筆者は，ジェームズ・I・マクリントック（James I. McClintock）が 1976 年に出版した『白い論理：ジャック・ロンドンの短篇小説』（*White Logic: Jack London’s Short Stories*）を参照した。『白い論理』は，ロンドンの短篇を論じた初めての本格的な研究書であり [2]，世紀転換期のアメリカ文学市場を視野に入れて短篇作家ロンドンの誕生を論じている点で参考になるところが多くあった。マクリントックは「序文」で [3]，ロンドンが形式とテクニックをキプリングから学び，「アクチュアリティ」がもたらす「揺るぎない真実」（strong truths）と「理念」（ideals）を混合した物語を書くための「科学的」文学方法をスペンサーの『文体の哲学』に見出した，と述べている（x-xi）。

ロンドンがキプリングから短篇のテクニックを学んだというマクリントックの説を参考にしながら，拙論ではキプリングの影響について以下のように書いた。

> マクリントックは，ロンドンが小説を書くテクニックを学ぶうえで参考にした人物として，1890 年代に英米で人気を博していたラドヤード・キプリングをあげている。マクリントックによれば，ロンドンはキプリングからドラマティックに語る文学手法を学んだという。たとえば「フレーム・ストーリー」という手法である。作中人物が場を設定し，相手に物語を語らせる手法で，これによって語りの中に作者が顔を出さずに済む。たとえば，『狼の息子』の最後に収録された「極北のオデュッセイア」は，マラミュート・キッドとプリンスの２人がナアスというミステリアスな人物から，白人に強奪された花嫁を探し求めて世界を旅する話を引き出すという設定になっている。（121-22）

ロンドンがキプリングから短篇のテクニックを学んだという説は，ロンドンの娘ジョウン・ロンドン（Joan London）が 1939 年に出版した伝記『ジャック・ロンドンとその時代』（*Jack London and His Times*）に見出せる。伝記のなかで彼女は，短篇の文体とテクニックを学ぶ必要からロンドンが「1 年目の医学生のように，流行雑誌に掲載されていた物語を解剖し，神経や筋肉をバラバラにし，関節を再びくっつけたりして日々奮闘していた」（169），「毎日手書きで，苦労しながら，彼はキプリングの物語を一つひとつ，ページごとに書き写した」（170）と書いている。ジョウンの説はその後の研究書や伝記でも繰り

返し使われてきた。たとえば，ロンドン復活の火付け役になった，アール・レイバー（Earle Labor）が1974年に出版した『ジャック・ロンドン』（*Jack London*）では，「ジャックは，文体を磨きつつ，日々キプリングを書き写した」と，ジョウンの説が紹介されている(154)。1997年のアレックス・カーショー（Alex Kershaw）による伝記『ジャック・ロンドン：ある人生』（*Jack London: A Life*）には，「キプリングの文体を会得しようと決意したジャックは，キプリングのリズムが自分のものになると感じるまで，物語を一つひとつ書き写した」（79）とあるし，2013年のレイバーによる最新の伝記『ジャック・ロンドン：アメリカ的人生』（*Jack London: An American Life*）では，「彼はキプリングの『平易な文体』（“plain style”）にひどく感銘を受け，自分のものにするべくページごとに書き写した」（119）とある。このように，ロンドンがキプリングから短篇のテクニックを会得したという説はロンドン研究においては一つの伝説になっている。したがって，拙論のキプリングの影響に関する記述もその伝説に沿った内容と言うことができる。

マクリントックの短篇研究に対するジェイ・ウィリアムズの批判は手厳しい。まず，マクリントックの『ジャック・ロンドンの揺るぎない真実』（*Jack London’s Strong Truths* は『白い論理』の再版）は「誤りや誤解にもとづく説明が多くて，実際のところほとんど役に立たない」（501）と批判されている。たとえば，作品の執筆順について，そのいい加減な検証ぶりをウィリアムズは指摘している。その例として，「1898年秋と冬のあいだ，ロンドンは出版に漕ぎつけようと必死だった。彼は北国の短篇小説を無視して，人気のある題材やもっと軽いジャンルはないかと市場調査を行なっていた」というマクリントックの説に対してウィリアムズは，その年の9月だけでロンドンは3つのクロンダイクの短篇を書いていて，10月に詩作に集中的に取り組んでいるあいだにも「白い沈黙」（“The White Silence”）を書いていた，と反証している（501）。また，マクリントックが提唱するロンドンの短篇を隆盛期，衰退期，再生期に分けることについても「支持できない」（同）としている[4]。

結論から言えば，ウィリアムズは，ロンドンが短篇を書く上でキプリングから影響を受けたことは否定していないけれども，その影響力を，マクリントックが主張するほど大きなものとは見ていない。1898年秋から1899年3月の手紙を詳細に検証してみると，ロンドンはキプリングについて言及しているが，彼の短篇の芸術性や内容を話題にしていないし，特定の物語を称賛することもない。マクリントックは，1898年から1899年にかけて『マクルアズ』誌（*McClure’s*）に掲載されたキプリングの短篇を使ってキプリングとロンドンの影響関係を論じているが，キプリングの最初の短篇が掲載されたのは1898年8月であり，その頃ロンドンはネバダ州に金鉱探しに行っていた。その後のキプリングの短篇が掲載されたのは，ロンドンがクロンダイク物語をすでに8篇書いたあとだった。1899年の書簡を見ると，ロンドンがこの時期の作家活動より前にキプリングの物語を読んでいた可能性はあるとしても，その確たる証拠があるわけではない。ロンドンがキプリングの散文を集中的に読むようになったのは1899年の夏・秋であり，その頃にはロンドンはすでに短篇を，少なく見積もっても，15編（そのほとんどが短篇集『狼の息子』に収録されている）書き上げていた（106）。となると，ロンドンは『マクルアズ』に掲載されたキプリングの短篇を読む前にすでに短篇を書くテクニックを身につけつつあったのであり，1898年から1899年にかけてロンドンがキプリングの短篇から影響を受け，そのテクニックを学んだとするマクリントックの説は疑わしいものとなる。ただ，ウィリアムズは，キプリングの短篇がロンドンに影響しなかったと言いたいわけではない。彼は，ロンドンとキプリングの影響関係を強調しすぎることを問題視しているのである。彼の論点は「キプリングのような，ある一人の作家が作家ロンドンの誕生の力になったという主張を否定する」（107）ことにある。「キプリングは，ロンドンが読んだ多くのうちの一人だったということ，ロンドンが称賛を口にしていたのはキプリングの詩であって，散文ではなかったということ，キプリングを読む前にロンドンはすでに短篇の創作方法を構築していたということ，ロンドンは広い意味でキプリングの恩恵を受けたと言っているにすぎないということ」（108）。ロンドンとキプリングの関係について以上のようにウィリアムズはまとめている。

このようにマクリントックの説を疑問視するウィリアムズだが，ロンドンとキプリングの影響関係について新たな説も提唱している。1898年から1899年春にかけてロンドンが読んでいたのは，キプリングの散文ではなく詩だった，とウィリアムズは言う。

事実，1898 年 10 月から 1899 年 6 月までロンドンは 22 の詩を書き，投稿するなど，この時期のロンドンは詩作にも取り組んでいた。1899 年 3 月の友人クラウズリー・ジョンズ宛の手紙ではキプリングの詩を引用しているし，4 月と 5 月にはキプリングの詩を送っている。1901 年 10 月に執筆したキプリング擁護論「これらの骨を甦らせよ」（“These Bones Shall Rise Again”）では詩人としてのキプリングを褒め称えている（109）。ロンドンは詩と短篇の形式との関係について理論化することはなかったけれども，詩の研究がロンドンの短篇の文体に影響があったことは確かだろう。ウィリアムズは，「詩のリズムはロンドンの全作品に響きわたっているし，とりわけ『星を駆ける者』（1915）に著しい」（110）と指摘する。

Ⅲ．ロンドンとスペンサー

マクリントックは，1900 年のデビュー前のロンドンに大きな影響を与えたもう一人の人物としてハーバート・スペンサーをあげている。拙論「デビュー物語」は，「文学的進化の現象」でロンドンが論じた文体の進化と文学形態の進化をスペンサーの影響だと指摘し，以下のように書いた。

> ロンドンがハーバート・スペンサーの社会進化論の影響を受けていることはロンドン研究者の間では認められた事実である。マクリントックの研究書でも，文体についてロンドンがスペンサーの『文体の哲学』から学んだことが指摘されている。読者に無駄なエネルギーを消費させずに作者の考えを伝えるためには，シンプルな言葉や文章構造が最適であることを，スペンサーから学んだという。しかし，「文学的進化の現象」を読む限り，進化論の影響はマクリントックが考えているよりも大きい。ロンドンは進化論を文体の理論のみならず文学の理論にまで拡大しているからだ。(128)

スペンサーの『文体の哲学』（*Philosophy of Style*）がロンドンの文体に影響を与えたとするマクリントックの説にはいくつかの根拠がある。1897 年にロンドンがクロンダイクのゴールドラッシュに行った際に持参した本の一つがスペンサーの『文体の哲学』だった [5]。また，マクリントックが引用しているように，ロンドンの２番目の妻チャーミアン・ロンドンによる伝記『ジャック・ロンドンの本』(*The Book of Jack London*) には，文体についてスペンサーの影響を受けたとロンドン自身が語ったというエピソードが紹介されている（McClintock 30）。こうした事例からマクリントックは，スペンサーの『文体の哲学』がロンドンの文体に大きな影響を与えたという仮説を立てている。ひょっとしたら，1909 年に出版された自伝的小説『マーティン・イーデン』（*Martin Eden*）の第 22 章で，作家志望のマーティン・イーデンが『文体の哲学』を読んだと明言している場面（235-36）もマクリントックの仮説を強めたのかもしれない。しかしながら，「ロンドンがスペンサーの『文体の哲学』から直接影響を受けた可能性はきわめて疑わしいように思える」（125-26）とウィリアムズは言う。

1900 年 4 月末に執筆した「文学的進化の現象」でロンドンが「進化の一般的法則に則り，あらゆる思考，そして思考を表現するあらゆる方法も凝縮されたものでなければならない。話し言葉であれ，書き言葉であれ，言語はこの法則の作用から逃れることはできない」（61）と述べていることから，彼が 1900 年の時点で進化論の影響を受けていたことは明らかだ。しかしながら，「文学的進化の現象」には，進化論哲学者スペンサーへの言及はないし（言及されているのは詩人のエドマンド・スペンサー），直接引用することもない。ウィリアムズの指摘によれば，ロンドンは小説技法について 1902 年以前に少なくとも 7 つのエッセイを書いているが，そこでもスペンサーの名前は出てこない（126）。1900 年以前に関して言えば，1899 年の 6 月と 8 月の書簡（London, *The Letters* 86, 103）でロンドンはスペンサーについて触れているが，いずれも話題になっているのは『第一原理』（*First Principles*）であり，『文体の哲学』ではない。さらに，ロンドンの書斎にあった本のリストを作製したデイヴィッド・マイク・ハミルトン（David Mike Hamilton）の『「私の商売道具」』（*“The Tools of My Trade”*）でも，『文体の哲学』は記載されていないし，序文で触れてもいない [6]。となると，拙論で論拠にしている「文体についてロンドンがスペンサーの『文体の哲学』から学んだ」というマクリントックの説の信憑性はきわめて薄いと判断せざるを得ない。

「文学的進化の現象」でロンドンは，16 世紀の年代記作家ロバート・フェービアンからラルフ・ウォルド・エマソンに至るまで数人の作家の文の平均語数を表示して，数百年のうちに文の語数が減ったこ

とで，文がいかに簡潔になったかを証明しようとする。文体の進化論的な変化を踏まえて，ロンドンは進化論的な見方を小説の変化に応用し，「今日の文学のあらゆる形態がこうした凝縮の傾向を例証している。短篇小説（short story）の成長は，長編小説（long novel）の衰退によって示されている」（63-64）という結論を導き出している。しかしながら，ウィリアムズが検証したように，文体や文学に関する進化論的な発想はスペンサーの『文体の哲学』の影響である可能性は少ない。

では，ロンドンは文体や文学の進化論的な発想をどこから手に入れたのか。「文学的進化の現象」に「シャーマン教授」という名前が登場する（62）。ウィリアムズは，L・A・シャーマン（L. A. Sherman）が1893年に出版した『文学の分析：イギリスの散文と詩の客観的研究のためのマニュアル』（*Analytics of Literature: A Manual for the Objective Study of English Prose and Poetry*）が「文学的進化の現象」の種本だと見ている。この本は大学のテキストで，文学の分析に「科学的方法」を用いているのが特徴である。シャーマンは，文の長さ，叙述の量，メタファーの使い方などを時系列的に分析して，イギリスの散文と詩がどのように進化してきたか，その過程を統計学的に調べ上げた。ロンドンがシャーマンの本を読み，自分の理論として利用したことは確かだ。実際にシャーマンの本を見てみると，ロンドンが示しているデータは，シャーマンの本の第19章「イギリス散文における文学の文の長さ」に示されているものと同じであり（259），明らかに，ここからロンドンはデータを借用していることがわかる（一部引用ミスがあるが）。さらにロンドンが現代の文の特徴を示す用語「簡潔さ（brevity）」，「凝縮した（concentrative）」，「引き締まった（compact）」，「きびきびした（crisp）」，「無駄のない（terse）」のほとんどはシャーマンの本でも使われている。短い語や簡潔な文を賛美したり，力のある文を求めたりする点でシャーマンとスペンサーは共通しているが，1900年の時点でロンドンがシャーマンを利用したのは，こちらのほうが具体的なデータを提供してくれたからだろう，とウィリアムズは主張する（128）。

上記の説明からわかるように，「文学的進化の現象」執筆当時ロンドンがスペンサーの『文体の哲学』そのものを読んでいたとする証拠はない[7]。しかしながら，作家志望者に宛てた1915年2月5日の手紙や，作家として成功した要素を書いた同年11月3日の手紙で，ロンドンは『文体の哲学』をとりあげている。その理由をウィリアムズは，その手紙が作家志望の人たちに向けたアドバイスであることを考えれば，有名人スペンサーの名前を使ったほうが便利だったからだ，と推測している（127）。

以上，ウィリアムズの研究書を参考にしながら，拙論「デビュー物語」のキプリングとスペンサーの記述の修正点について説明してきた。ウィリアムズの研究は本文と注で560ページほどもある労作であり，膨大な資料を駆使して，ロンドン研究でこれまで前提とされていた説を網羅的に検証している。キプリングとスペンサーの影響以外にも，たとえばロンドンと編集者との交渉など，ウィリアムズの研究には拙論の補強材料となるものがいくつもあったが，ここでそれらを紹介する余裕はない。筆者は，拙論「デビュー物語」を出発点として短篇作家としてのジャック・ロンドン再評価を目指している。ウィリアムズの研究は，筆者の今後の研究において無視できないものとなるだろう。

脚注

[1]　以下，ウィリアムズの本からの引用はページ数を括弧に入れて示す。

[2]　ロンドンの短篇研究としてキング・ヘンドリクス（King Hendricks）の「ジャック・ロンドン：短篇小説の巨匠」（“Jack London: Master Craftsman of the Short Story”）がある。これは，1966年ユタ州立大学から出版され，のちにRay Wilson Ownbey編*Jack London: Essays in Criticism*（1978）に収められた。ヘンドリクスの論文にはキプリングやスペンサーの影響についてまったく記述されていない。

[3]　『白い論理』は，1997年に，*Jack London’s Strong Truths: A Study of His Short Stories*というタイトルでMichigan State UPから再版されている。ただ，新版では，76年版にあったマクリントックの「序文」がサム・S・バスケット（Sam S. Baskett）による「序文」に差し替えられている。

[4]　マクリントックはロンドンの短篇作家としての活動時期を区分している。『白い論理』の序文によれば，1898年から1908年までが隆盛期で，ロンドンが短篇のテクニックを学び文学理論をまとめ，クロンダイクを舞台にした短篇を書いていた時期。1906年から1912年は衰退期で，南海の物語や社会主義の物語を書いていた。哲学的なペシミズムで無気力となり，駄作を発表していた時期。1912年から1915年までは物語を書いていない。1916年は再生期。ユングやフロイトの心理学的なテーマに取り組み，象徴主義的な作品を書いた。

[5]　アーヴィング・ストーン（Irving Stone）が1938年に書いた伝記『馬に乗った水夫』（*Sailor on Horseback*）よれば，ロンドンがクロンダイクに持参した本は，スペンサーの『文体の哲学』のほかに，ダーウィンの『種の起源』，マルクスの『資本論』，ミルトンの『失楽園』（130）。

[6]　ハミルトンは，ロンドンがクロンダイクに持参した本として，マイナー・ブルースの『採金地を通ってアラスカへ』，『失楽園』，『種の起源』をあげているが，『文体の哲学』は含まれていない（8）。

[7]　マクリントック以降に出版されたロンドンの短篇研究として，ジーン・キャンベル・リースマン（Jeanne Campbell Reesman）が 1999 年に出版した『ジャック・ロンドン：短篇小説研究』（*Jack London: A Study of the Short Fiction*）がある。1897 年カリフォルニア大学中退後のロンドンについて「彼の教育は始まったばかりだった。大量の本を無我夢中で読んだ。そのなかには，マルクス，ラスキン，モリスだけでなく，キプリングやブラウニングもあった。キプリングとブラウニングからは，自分の著作についてのアイデアを得た。しかし，彼にとって当時最大の発見はハーバート・スペンサーの著作だった。『文体の哲学』を彼はその後も高く評価している。とりわけ彼が興味をもったのは，進歩は神学にではなく，生物学や物理学の法則そのものに見出せるとするスペンサーの考えだった」（7）と書いている。リースマンは，マクリントックほどキプリングの影響を強調していないが，『文体の哲学』を，若きロンドンに社会進化論を教えた本として重視している。ただし，当時ロンドンが『文体の哲学』を読んでいた証拠は示されていない。

参考文献

Hamilton, David Mike. “*Tools of My Trade”: The Annotated Books in Jack London’s Library*. Seattle: U of Washington P, 1986. Print.

Kershaw, Alex. *Jack London: A Life*. New York: St. Martin’s P, 1997. Print.

Labor, Earl. *Jack London*. New York: Twayne Publishers, 1974. Print.

------. *Jack London: An American Life*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2013. Print.

London, Jack. *The Letters of Jack London*. Eds. Earl Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard. 3 vols. Stanford: Stanford UP, 1988. Print.

-------. *Martin Eden*. Penguin Books, 1984. Print.

-------. “Phenomena of Literary Evolution.” *Jack London Journal* 1(1994): 60-64. Print.

London, Joan. *Jack London and His Times: An Unconventional Biography*. New York: The Book of League of America, 1939. Print. .

McClintock, James I. *White Logic: Jack London’s Short Stories*. Cedar Springs: Wolf House Books, 1976. Print.

Reesman, Jeanne Campbell. *Jack London: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1999. Print.

Sherman, L. A. *Analytics of Literature: A Manual for the Objective Study of English Prose and Poetry*. Boston: Ginn and Company, 1893. Web. 23, July. 2015.

Williams, Jay. *Author Under Sail: The Imagination of Jack London*, 1893-1902.　Lincoln: U of Nebraska P, 2014. Print.

小古間甚一「ジャック・ロンドン，デビュー物語
－短篇小説と世紀転換期のアメリカ文学市場」大浦暁生監修，アメリカ自然主義文学研究会編『いま読み直すアメリカ自然主義文学 視線と探究』，中央大学出版部，2014 年，115-36。

アーヴィング・ストーン『馬に乗った水夫　ジャック・ロンドン，創作と冒険と革命』橋本福夫訳，早川書房，2006 年。

Research Report

Reconsidering the Influence of Rudyard Kipling and Herbert Spencer on Jack London.

-Reconsidering "Jack London's Debut as a Short Story Writer"

Jinichi KOGOMA

Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

***Abstract*:** The aim of this paper is to reconsider the influence of Rudyard Kipling and Herbert Spencer on Jack London as discussed in my paper, "Jack London's Debut as a Short Story Writer" published in March, 2014. The discussion on this issue was based on White Logic, a study of London's short stories by James I. McClintock. However, Author Under Sail by Jay Williams, published in November 2014, illuminates McClintock's misunderstandings of Kipling and Spencer's influence with respect to London's short story writing techniques and his conceptions of literary evolution. Williams suggests that London had already developed his techniques of writing short stories before he read Kipling's stories, that Kipling's poetry, not prose, influenced London's writing, and that London didn't get from Spencer's Philosophy of Style his own ideas of style and literary evolution developed in his essay, "Phenomena of Literary Evolution."

***Key words*:** Jack London, Rudyard Kipling, Herbert Spencer, short stories, literary evolution.

Received December 8, 2015 ; Accepted February 15, 2016
＊Corresponding author（E-mail:jkogoma@nayoro.ac.jp）